

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第20回

《黄金の三角地帯》を目指して

『色の音楽・手の幸福—ロラン・バルトのデッサン展』
関連国際シンポジウム「バルト・共感覚の地平」から

稲賀 繁美

(いながしげみ／国際日本文化研究センター、
総合研究大学院大学)

ロラン・バルト——と言っても、昨今ではもはや仏文専攻の学生以外には、ほとんど知る人もないのが実態だろう。あるいはこの名前を持ち出したとたんに、仏文関係者の占有物といった臭気が、ぷうんと漂う。事典的に言えば、前世紀の60年代から70年代にフランスを中心として席卷した構造主義者四天王のひとり、文学批評における代表格にして、コレージュ・ド・フランス教授。日本滞在の体験を基にした『記号の帝国』(宗左近訳、筑摩文芸文庫版では『表徴Eの帝国』)の著者——そんなバルトの展覧会が「色の音楽・手の幸福—ロラン・バルトのデッサン展」と題して、最初に東京大学駒場キャンパスに改修なった美術博物館で、つづいて目下は昨年完成の京都大学の総合博物館で開催中。パリではすでに昨年、ポンピドー・センターで、没後20年を記念する「バルト展」が開催されていた。それを追う企画が日本で開催に漕ぎ着けたについては、日本との縁^{えん}浅^あからぬこの文人と、何度かの特権的な結び付きを得た本邦の高等学術施設の関係者に、とりわけ深い思い入れのあったことも、確認されねばならない。とはいえ、選ばれた会場が、東西を代表する旧帝国大学付属施設というだけで、これまた高踏的で学術的な臭みが立ち込めるのは、致し方あるまい。

*

東京会場では、11月28日夕刻から30日午後の3日間にわたり、関連企画として「バルト・共感覚の地平」と題される国際シンポジウムが開かれた(総合文化研究科超域文化科学専攻・UTCP[共生のための国際哲学交流センター／「リーダー」は小林康男教授^大主催)。初日11月28日の東京日仏学院(共催)でのラウンド・テーブルこそ同時通訳つきだったが、2日目に降の、駒場キャンパスでの会合は、通訳なし。白人も黄色人種もお揃いで専らフランス語ばかりの会場に、「ここ、まるで日本じゃないみたい」、と漏らすフランス人聴衆もあった。

とはいえ、先述の四天王、精神分析のラカンも、マルクス主義哲学のアルチュセールも、文芸批評家・エッセイストのバルトも、さらには『知の考古学』や『性の歴史』の「道徳家」フーコーも亡く、続く脱構造主義を飾った『千のプラトール』のドゥルーズも自殺し、社会学者ブルデューも死去し、「脱構築」の哲学者デリダも客離れの憂き目にあっている昨今。すでに「実物をどうしても見たいというほどのフランス人が払底してしまった」(松浦寿輝)御時勢とあっては、日本に滞在するフランス語圏の聴衆も、もはや宗主国からの遠来のお客様に、さし

て絶大な期待など寄せてはいない。お目当てとはいえば、まずは映画評論家、蓮實重彦・元東京大学総長の基調講演であり、締めは演劇研究者にして演出家、渡邊守章・放送大学副学長の総括講演——それが、会場に昇るエスカレーターで立ち聞きをした限りでの下馬評だった。

映画狂人、蓮實重彦氏は、フェードルを暗記できず、自転車に乗れば〈自然に〉転倒し、買いたいものは買わず——というバルトにおける不作為、失策の系譜を、〈愛するものについて、人はうまく語れない〉という認識に結び付け、病気から回復してゆく〈主体〉の横柄さと、死という〈限定され〉〈考えの及ばないもの〉とのあいだにあって、ひたすら消耗を深めてゆくばかりの倦怠感、疲労感という不確実・無限定で分類不能な退化に、嫌悪と悲嘆もて沈潜するバルトを描き、それが〈何の役にも立たない無償の行為〉へと純化されたものこそ、コジェーフが日本に見た〈純粋なスノビズム〉であり、その悲嘆の相貌を1966年5月10日の東京大学法文二号館で講演会開始を待つ、孤独で神経質なバルトの肖像写真に収斂させた。そこには『明るい部屋』の「皇帝を見た眼を見る私の眼差し」よろしく、額縁の外に位置する通訳(若き日の蓮實氏)を「見つめるバルトの目」を、今こうして見つめる蓮實氏の眼差しがある。

詳述できないのが残念だが、これに続く発表には、日本からは、バルトのプルースト読書を詳細に分析し、バルトを〈良き生成論者〉(!)と認定した吉田城。バルトにおける〈錯乱〉と〈狂気〉とを差異化したうえで、〈始末に終えないもの〉を語り、それについて書きはしたが、〈始末に終えないものを書く〉ことはしなかったバルトの〈ロマネスク〉の限界を、暫定的な結論として〈遺憾〉とした、詩人・小説家の松浦寿輝。写真のもたらす多幸状態と悲嘆とのあいだに引き裂かれたバルトの〈流産〉は〈書くこと〉においても同様に〈失敗〉へと運命づけられている、として若武者の初陣を飾った桑田光平。「現実の効果」と

題された歴史記述批判を手掛かりに、『記号の帝国』にみえる乃木大将夫妻自刃直前の写真の説明「彼らは死にゆくことを知っている。だがそのことは露見していない」に、意味には還元されない記号の物質性を読み込み、切れ味の良いフランス語で腑分けした大浦康介。最後の『明るい部屋』の副題に単数で「ノート」と記すことにより、晩年のバルトは〈断片〉を破棄したと主張する石川美子。そして時間不足から——晩年のバルトの「小説の準備」よろしく——発表それ自体が流産におわった、司会兼任の石田英敬。十分な討論が展開できない恨みはあったが、それぞれに楽しめた。

対するフランスを中心とする外国勢では、〈気圧計の感受性〉に注目し、ルソーを引用しながら「私の魂に気圧計を適用する」という決定的な箇所をバルトがわざと抹消していることを目聡く指摘した、作家のクリスティーヌ・モントラベッティ。幼少の頃、「穴の底にひとり取り残されて」、見下ろされ、軽蔑された「排斥」体験を、バルトにとっての「書くことによる手ひどい除外」のいわば原体験と位置付けたアンヌ・エルシュヴェルグ=ピエロ。さらにécritureの理論家を自称するバルトの、見た目の明晰さの陰に隠された盲目性、とりわけ書記言語としての日本語の特性への無知と、音声言語モデルによる接近の無謀さ、そして結果としての日本回避を、時枝誠記まで援用して痛烈に批判したアンヌ=マリー・クリスタンなど。どちらかという女性参加者たちの発表のほうが、バルトの細部に密着して新味を感じた。

*

こうした二日間の討議を受けたトリの渡邊守章氏は、ハナの蓮實氏が同じ場所を援用したとはご存じないまま、〈講演会なんてうんざり。感じるのは倦怠ばかり〉、というバルト自身の悲嘆の告白を、冒頭でこれ聞けよがしに聴衆に向けて朗読し、あとはお得意の〈即興の天才〉(小林康夫)を縦

横に発揮した。ブレヒト主義者のバルトには歌舞伎は趣味に合わず、能は見た公演も凡庸だったが、すでにクローデルが分析しているので敬遠したらしいこと。文楽では、クローデルが「愛らしくない」と断定する人形を、敢えて「愛すべき」と形容しており、そこには「魂」の大嫌いなバルトとしてのカトリック作家への対抗意識も明白なこと。また『記号の帝国』で有名な中空としての東京論は、おそらくクローデルの蘇州を歌った詩を下敷きしているだろう。バルトの文楽の記号学的分析はすばらしいが、日本語を理解せずに鑑賞する限りでしか妥当しないこと。バルトの〈signesの帝国〉もクローデルが中国で孔子廟を見て感応した〈signesの宗教〉を下敷きにしたもので、バルトがécritureで本来取り上げるべき漢字や仮名文字を正面から取り上げず、表面的な文化現象の分析に逃避したのは、たしかに問題だが、発話としてのparoleとは別個の、書く振る舞いや身体行動による意味作用にもsignesを見たことには、豊かな理論的可能性が潜んでおり、その限りでバルトのあらゆる誤謬も恕したい（これはクリスタン教授への反論）。大切なのは、俳句の断片性への偏執がバルトをしてテキストの理論からテキストの快楽へと、まことの宗旨替えへと導びき、日本に理想郷〔ユートピア〕ではないにせよ、無の場所〔a-topie〕を見いだしたことだろう。

下手くそな要約で恐縮だが、この総括は二日目午後の議論をほぼ総括しており、渡邊守章氏の常ながらの「能弁(3)」、文字通り会場を圧倒し去った。だが、会合が終わると、守章先生は傍日よろしく、やおらボソッとこう一言。「ねえ、どうお、今度もたいた会議じゃなかったンじゃなァい？」「イヤ皆さん、蓮實先生と守章先生のお話を聞くのが楽しみでおいでなのですから」。もはやこれ、おべっかでも何でもなし、偽らざる現実。フランス人たちが、わざわざ日本人(?)のフランス語を聞きに来る。日仏間の主客はこの四半世紀で見事に転倒した。とはいえ、カンパンの主演俳優はと

もにトーダイ退官後の「名誉教授」。これまた長期不況時代におけるフランス文明の凋落と衰退を象徴する、皮肉な符丁でなくて何であろう。おりからみず書房では石川教授を監修者として『ロラン・バルト著作集』全10冊刊行が企画されている。だが考えてみればこれも、ほかにわざわざ日本語に訳出するに値するほどの商品価値ある原材料が払底してしまった末世の現実を物語る、仏文業界の延命策ではなかろうか。

*

ところが、お隣り中国の現状は、こうした日本の衰退とはおおいに趣を異にする。10年にわたる滞仏から北京大学に着任してほどない董強は「バルトと中国——失敗した出会い?」と題して、半ば即興のおそるべき話術を披露し、会場を沸かせた。以下この発表に集中して、会場の雰囲気的一端をお伝えしたい。「中央の帝国」から「記号の帝国」への招かれざる客、といささか韜晦まじりに自己紹介した董強は、「記号の帝国」に魅了されたバルトが「それで中国は?」(『ル・モンド』1974年5月)に吐露した「味気無い」中国体験の幻滅を想起し、しかしこの表題が昨年パリで開かれた現代中国芸術展にそのまま流用されたことに言及し、話題の導入とする(この場では董氏は語らなかったが、同展の出品交渉からカタログの中文法訳に至る作業でも、董強氏自身が中核的な役割を担っていたことを、後に個人的に伺った)。文化大革命の頃のテル・ケルの毛沢東主義の熱狂と、それとは対照的な人民中国側の無関心という、これまで長らく続いた一方通行の片思いが、今や30年遅れの時間差攻撃となって発現している。中国で構造主義の翻訳が始まったのは80年代だが、天安門事件でそれも一旦頓挫する。ようやく21世紀を迎えて『バルト論文選』や『バルトによるバルト』などが紹介され始めるが、「眼球過大、腹腔過小」即ち、興味深々なれども消化不良。知識人のあいだで「バルト」の名前は飛び交うが、有名な逸話以上には実態が知られ

ず、また良訳もあれば悪訳も立ち交じる。そんな需要と供給の両面にわたる不均衡が顕著ななか、晩年の写真論『明るい部屋』が2003年に名訳を得て話題を攫い、ちょっとしたブームが発生し、目下『エッフェル塔』、『レッスン』なども含めた、大規模な翻訳計画が——董強氏自身も巻き込み——一気に浮上しているという。

という次第で、既にバルトとの対話が、黄金時代の残滓を懐かしむ回顧録の相を呈している日本とは打って変わって、中国と欧州との学術対話は21世紀の課題であり、バルトとの遅まきの出会いは、その中でも枢要な戦略的拠点となる。というのも、生ものと煮たものといった二項対立で世界を切り分ける教条的な構造主義理解が、中国の対句の伝統と軽薄に平仄を合わせてしまった表層の下で、バルトの語り口には、二項対立の透き間にしなやかに滑り込む微細の感性 (subtilité) と味わい (savour) があるからだ。記号学全盛期にはフランソワ・チェンが『虚と實』といった著作をフランス語で出版して、中国詩学をあまりに図式的にフランス知識人に理解できる陰陽の二項目構造に還元してしまったが、そんなおべっかを遣っている暇があるなら『文心雕龍』をちゃんとフランス語に訳して欲しいものだ、と董強の舌鋒はフランスに君臨する先行世代の大御所への痛烈な批判に及ぶ。聲の物質性や肉体の息吹に形を与えて伝達する〈書écriture〉の在り方、さらにはコトバのさざめき (bruissement) をも微細に分析した中国の修辞学が、旧態依然たる文献学に閉じこもる東洋学者の専有物ではなく、フランスの知性と感応する地点。それこそ、バルトによる明らかな意味 (l'obvie) と籠もった意味 (l'obtus) といった着眼点に、豊かな内実を与えるものだろう。

この辺りからやや大言壮語になりだした董強は、六朝の気韻生動に〈意味生成〉の現場を捕らえ、竹林の七賢人に見る道徳と美との遊離を、現実参加から撤退したバルトの美的享受と結び付け、バルトの偏愛し

た〈名付けようのない〉ものとして東洋哲学の〈道〉を再解釈するという議論になだれ込む。果ては、「色の音楽」展の題名に敬意を払ってか、クローデルの言う「眼は聴く」からの連想で、色彩としての音楽を語り、色の物質性を金剛般若経の色即是空に無理やり連結して、質疑応答で、ロンドン大学名誉教授、ライブニッツの国際的権威たる石黒ひで教授から、でも現象界は空でしょ、と強引な解釈を窘められたりもした。いささか勇み足も含みながら、この若き中国の偉才は、バルトを結縁としてフランスと日本と中国の学者が「黄金の三角地帯」を築く将来への期待を熱く語って、盛大な拍手を得た。その実現の可能性は、30年早くバルトを体験してしまった日本の学者たちと今回密接に交歓し、その豊かな蓄積に肌で触れたことから、董強氏自身、確信をもって納得した様子だった。

董強氏は自らも書画を嗜み、現代美術史に大きな関心を寄せている。まだ新帰朝者として北京の事情がよく分からないと零しているが、彼のような実力派が、そのもてる力を発揮するようになれば、ひとり仏文学会に止まらず、現代美術の国際交流を促進する環境も、新たな局面を迎えることだろう。当方はすっかり失念していたのだが、董氏は当方が北京大学で行った講演を良く覚えていてくれて、帰国前に短期、京都に滞在した同氏とは、吉田城、大浦康介氏とともに歓を尽くす機会を得た。「黄金の三角地帯」確立への胎動は既に始まっている。

* 同展は東京大学教養学部美術博物館 (2003年11月27日-12月25日) および京都大学総合博物館 (2004年1月14日-2月15日) で開催。

** 本国際シンポジウムの報告は、追って刊行の予定。展覧会関連記事は、東京大学教養学部『美術博物館ニュース』34号参照。会場ではカタログも販売中と聞けが、本稿執筆までに入手できず。ここでは紙面の都合で参加者全員の発表に言及できなかったことを遺憾とする。なお、放送大学授業番組『表象としての日本』(平成16年度開講)における渡邊守章氏の出演による「ロラン・バルトあるいは〈虚構〉としての日本」も参照のこと。本シンポジウムの日本語版に相当する発言が見られ、文人バルトと言語芸術や劇との接点が探られている。田中容子氏のご手配に深謝。